

研究紀要

第16号

2001

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

研 究 紀 要

第 16 号

2 0 0 1

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

序

[論文]

- 手焙形土器……………高橋 一夫 (1)
—その宗教性と政治性—
- 埼玉県坂戸市中耕第21号方形周溝墓の墳丘復元試論……………杉崎 茂樹 (9)
- 古代神社遺構の再検討……………井上 尚明 (21)
- 信仰資料としての紡錘車……………鈴木 孝之・若松 良一 (37)
- 須恵器のロクロ技術を考える……………岩田 明広 (81)
- 関東地方の施釉陶器の流通と古代の社会 (2) ……………田中 広明 (97)
- 末野窯成立期の系譜と陶邑窯……………坂野 和信 (141)
—系列の比較と土器組成—
- 取蔵資料の学校における活用……………石井 伸明・川島 健 (183)
—埼玉県埋蔵文化財調査事業団の取り組み— 野中 仁

手焙形土器

—その宗教性と政治性—

高橋 一夫

はじめに

手焙形土器は銅鐸が消滅するころ出現し、定型化した前方後円墳が出現するころに消滅する。つまり、手焙形土器は2世紀後半から4世紀初頭の約150年間のいわゆる邪馬台国時代に存在していた。手焙形土器は大阪湾沿岸地域で出現し、その後次第に分布圏を拡大していくが、なぜ手焙形土器は分布圏を拡大していったのか、その背景には何があったのか、手焙形土器の分布のもつ歴史的意義について考えていきたい。

1 用途

多くの手焙形土器を観察してきたが、器面の状態が良い手焙形土器には、ススの付着が確認できる場合が多い。現在、740個体中92個体にスス付着を確認しており、その割合は12%である。器面の状態が悪いものも半数近くは存在するので、ススの付く確立は倍近くになり、その割合は25%となる。ススは覆部内面から面の内外面にかけての部位に多く付着していることから、まず内部で火を燃やしたと考えてまちがいない。ススは濃くべったりと付着しているものは稀で、大半のものはうすすらとススが付着している状況である。ススの痕跡から考えると、内部で常時火を燃やしていたのではなく、短期間の燃焼であったことが推察される。つまり、燃やした火は非日常的な火であった。

さて、燃焼させた材料はなにか、ススからは皆目見当がつかない。手焙形土器は後述するように祭祀に使われたと考えられるので、火それ自体が重要であると思われるが、同時に香木のような香りを醸し出すものや、幻覚等を伴う植物を加えた可能性も指摘しておきたい。

2 出土遺構と祭祀の対象

手焙形土器は住居跡、溝、環濠、河川跡、墓、土塚、土器集積、井戸、水田跡等のさまざまな遺構から出土するが、墓などのいくつかの遺構を除く多くの遺構は廃棄場所であり、その遺構を祭祀の対象としたとは考えがたい。こうした遺構から出土した手焙形土器は破片が多いことから、祭祀終了後に破碎して廃棄した状況がうかがえる。破碎行為があったことから、手焙形土器はまさに祭祀用の土器ということが出来る。

墳墓の場合は、手焙形土器は葬送儀礼終了後、①そのまま埋納する例、②底部を穿孔し仮器状態にして埋納する例、③破碎する例が知られている。手焙形土器の内部で火を燃やすことから、夜に行われた秘儀に用いられたと考えるのが妥当であろう。手焙形土器は葬送の儀礼にも使われたのであった。

また、手焙形土器は水田の畦の中に高坏などの土器と一緒に埋め込んだり、水口に置いたりする例などもある。こうした事例から手焙形土器は農耕祭祀にも用いられていたことがわかる。

出土遺構から祭祀の対象がわかるのは、農耕と葬送にまつわる祭祀であるが、その他の祭祀にも用いられたことは十分推測できる。ここで、三重県蔵持黒田遺跡から手焙形土器を用いた祭祀を考えてみよう。

蔵持黒田遺跡では32個体もの手焙形土器が出土している。なかでも注目を引くことは、斜面を整形した平坦面に2個の手焙形土器が、開口部をテラス前方に向けて置かれた状態で出土したことである。この出土状態は手焙形土器の使用状況を示す貴重な一例といえる。蔵持黒田遺跡ではその他に住居跡、土壇、土器集積、焼土遺構等が確認されている。住居跡は3軒調査されたが、いずれも炉は築かれていない。住居に炉が築かれてないことは、その住居は非日常的な住居であったといえることができる。ここでは詳細を記さないが、丘陵上にある蔵持黒田遺跡は、遺跡全体が祭祀にかかわる遺跡で、炉のない住居跡は祭祀の時に臨時に使用された住居と考えることができるのである。

蔵持黒田遺跡は一般集落から離れており、かつ遺跡全体が祭祀空間であった。ここで行われた祭祀は遺跡の規模から一集落の祭祀というより、複数集落が集まって執り行った祭祀であった可能性が大きい。

蔵持黒田遺跡出土の土器型式から時間幅を考えると100年ほどである。出土した手焙形土器は32個体であることから、単純計算すると3年に一度の使用率となる。蔵持黒田遺跡は四分の一が保存地域になっているので、本来あった手焙形土器の個体数を50個と想定しても2年に一度の使用率となる。また、2個一対で使用した時があったので、このことを勘案すると使用頻度はさらに低くなるが、少なくとも年に一度の祭祀に使われたと思われる。蔵持黒田遺跡での祭祀の実体は把握できないが、手焙形土器はかなり重要な祭祀に使用されたことが想定されるのである。

3 A類とB類

手焙形土器は鉢部口縁の形態から口縁がくの字状のA類、受口状口縁のB類に大別できる。A類は大阪河内地方が（以下、河内系）、B類は山城・近江地方が発祥地（以下、近江系）である。A類は基本的に文様がつけられることがなく飾られない手焙形土器であるが、B類は飾られる手焙形土器である。この原則は発祥地以外の地域でA・B類の手焙形土器にも適用される。例えば、河内地方のB類の手焙形土器は飾られている。

手焙形土器の原型は、在地の鉢に覆部をつけたものである。故に、河内地方はA類が主体に、山城・近江地方はB類が主体となる。また、山陰や古備などでは手焙形土器の鉢部に適当な鉢があったので、在地の鉢を使用し手焙形土器としている。X類と呼んでいるものである。X類は基本的に当該地域だけに分布し、他地域に影響を与えないことを特徴としている。いっぽう、河内系のA類と近江系のB類はそれぞれの特徴を保持しながら各地へと伝わっていく。おそらく、人の移動とともに伝わっていったと思われるが、A類とB類は各地に伝播していくという力を内包していた。この伝播力の源泉はどこにあるのか、次に考えていこう。

4 A類と河内地方

白石太一郎は初期古墳の分布から大和と河内の関係を次のように述べている。長くなるが引用し

よう。

「北の淀川水系では各地に出現期古墳がみられるのに対し、南の大和川水系では奈良盆地南部のヤマトの地に限られていることは、この時期大和川流域ではヤマトの覇権が確立しており、それ以外の地域の勢力が古墳を造れなかった結果にほかならないと思われる。この畿内南部の大和川流域こそが、邪馬台国の、ひいては初期ヤマト王権の本来の領域にほかならなかったのではなかろうか。瀬戸内海沿岸を中心とする西日本各地に出現期古墳がみられるなかで、きわめて重要な地域である葛城や南河内にそれが見出せない理由は、これ以外にみあたらない。あるいは、難波津とともにヤマトの外港として重要な紀ノ津を擁する紀ノ川河口付近に前期前半の古墳がまったくみられないのも、この地域が初期ヤマト王権の原領域に含まれていたためかもしれない。こう考えてよければ、三世紀前半から中葉の邪馬台国、それにつながる初期ヤマト王権の本来の領域は大和川流域の大和と河内の領域であり、北の淀川流域の摂津や山城は含まれていなかったと考えざるを得ないのである。「このように大和と河内こそ邪馬台国以来のヤマト王権の原領域であり、大和と河内は同一の政治的領域であったと考えている。この領域の中では、三世紀の初頭に奈良盆地東南部の狹義のヤマトの覇権が確立し、この邪馬台国を中心に西は玄海灘沿岸に至る広域の政治連合が形成されていたのである」（白石太一郎1998）。

つまり、河内地方は大和政権の原領域と白石は考えるのである。私もかつて大和と河内の関係を次のように考えた（高橋一夫 1998）。

①邪馬台国はもともと瀬戸内海交通の終着点であった河内地方にあったが、後漢の滅亡後の魏・呉・蜀三国鼎立に向けての動乱の時期に、安全を確保するために四方を山に囲まれ出入口は4箇所しかなく、中国の城壁国家に類する奈良盆地に本拠地を移した。

②倭国大乱は後漢の権威に頼っていた政治集団が、後漢の滅亡によって旧来の権威が否定され、新たな政治的枠組みを生み出すための戦いだった。

③こうした状況のなかで銅鐸が消滅し、手焙形土器が創出され流行した。このように、河内地方は邪馬台国の故地であり、大和政権の原領域であった。A類の手焙形土器はこうした地域に出現したのである。

5 B類と山城・近江地方

現在のところB類はA類よりも多く出土しており、B類も1期から出土していることから、B類はA類とともに手焙形土器の主流といえる。また、出土状況を見ると同一地域・同一遺跡でA類とB類が一緒に出土する例も少なからず存在することから、両者は決して対立するものではないことがわかる。A類とB類の発祥地は手焙形土器で見るとともに親密な関係だったようだ。つまり、河内と山城・近江を中心とした地域が、当初の手焙形土器祭祀体制を支えた地域であった。

6 分布

まず、時期別の分布状況を確認しておこう。

1期は弥生時代後期後半の中葉で出現期である。河内と山城地方つまり大和川水系と淀川水系を

主体に分布する。

2期は弥生時代終末で、畿内では最も多くの手焙形土器が出土する時期であり、岡山、和歌山、三重、愛知、滋賀、福井というように、畿内周辺地域に分布圏を拡大する。

3期は庄内式期に該当し、aとbの二つの小期に区分できる。

3a期は拡散期で北関東から北部九州まで分布圏を拡大する。しかし、分布圏の末端地域での出土量は少なく、2期分布圏での出土量が多い。

3b期はより多くの地域で出土するようになるが、分布圏は2期と変わらない。しかし、畿内とその周辺地域での出土量は減少する。

4期は布留式期の初頭で、消滅期である。手焙形土器の形態も退化し、ダルマ型に統一される。この時期は定型化した前方後円墳が各地に出現する時期であり、こうした時期に手焙形土器は消滅するのである。

こうした手焙形土器の分布状況から私は次のように考えた。

1期の分布地域が倭国大乱後の邪馬台国の中核地域である河内地方で手焙形土器祭祀が出現した。2期の分布範囲が邪馬台国連合を示しており、これらの地域が連合して初期大和政の成立に深くかかわった地域でもあった。3a期には邪馬台国の政治的影響力は関東から北部九州まで及び、大和政権誕生の基盤を築いた（高橋一夫 1998）。

7 心理的・精神的共通基盤と政治圏

先に見たように手焙形土器はさまざまな祭祀に使われた。しかも、ススの痕跡から火を使用する祭祀で、手焙形土器の分布から時代とともに各地に広がったという事実が判明した。

ここで重要なことは、単に手焙形土器を使う祭祀が流行しただけなのか、祭祀の背後に心理的・精神的共有性があったのか、または宗教的統合が行われたのか、それとも政治的統合があったのか、という視点である。かつてはこの視点が欠落しており、祭政一致を念頭に、手焙形土器＝政治的色彩を帯びた遺物と断定し、手焙形土器の分布圏＝政治圏として論を進めた。ここで、分布の問題について再考してみよう。

都出比呂志は分布圏と政治圏の問題について積極的に論じ、前方後円墳の分布圏はなにをもって政治圏とすることができるのか、という命題に取り組んだ。

都出はまず田中琢の心理的・精神的共通基盤説を紹介している。田中は「似かよった祭りを挙行了たからとして、それを連合や国家があった証拠とすることができるだろうか。かつて銅鐸を使用する祭りを共有する地域があった。剣や矛の形を写した武器形祭具を使うまつりを共通にした地域があった。そこに連合や国家があっただろうか。それを考え、論ずる人はいない。（中略）銅鐸や武器祭具による祭りを共有する村人たちのあいだには、心理的な精神的な共通基盤が成立していった」と考えた（田中琢 1991）。

都出比呂志の考え方

◎「考古資料から政治圏を議論する方法論を鍛える必要を痛感した。すなわち、前方後円墳の分布が政治圏を示すとする日本考古学における従来の『常識的』理解は、決して考古資料の純粋な操

作のみから帰納されたものではなく、文献史料の研究を基礎とするものである。」とし、前方後円墳の成立期に、各地の首長は前方後円墳という墳形を採用したが、しばらくのあいだ、その埋葬施設は地域性を維持した。それは、「前方後円墳という外形は採用したが、埋葬施設という集団の伝統の重要な部分を維持する集団が存在していたのである。この現象は、前方後円墳祭式の分布拡大に政治が介入していたことを物語るものといえよう。すなわち、各地首長は前方後円墳祭式の採用にあたって、墳墓祭式の諸要素を厳密に選択しているのであって、単に前方後円墳という墳墓様式が流行しはじめたからそれを模倣したというものではない。さらに、後円墳を築造した首長と後方墳を築いた首長とがあり、その差異が首長の出自など、それ以前の歴史的背景に根ざしており、墳形が自由に選択できるという性格ではなかったことは、墳形の差異に政治性が反映していることを最も雄弁に物語るものといえよう。」

前方後円墳には墳形という統一性と埋葬施設の地域的伝統の二面を有しており、統一性に政治が介入していたこと、さらに前方後円墳と前方後方墳という二墳形があり、墳形は自由に選択できなかつたことにも政治性が反映していると説いている（都出比呂志 1995a）。

◎「弥生時代後期についてみると、日本海沿岸地方各地の首長は、四突起方丘墓（四隅突出墓）という共通の墳墓形式を有していたのにたいし、瀬戸内東部の首長たちは、岡山県橋築遺跡や兵庫県原田中遺跡のような二突起方丘墓を共有していた。この現象のみをみれば、墳墓祭式の様式を共有するにすぎない。しかし、この時期、山陰や瀬戸内東部などの地域単位に土器の地域性は顕著であり、相互交流よりも、地域間の割拠の側面が強い。さらに、先にみたように、この社会には、高地性集落の発達に示唆された政治的緊張が存在した。この時期の社会をこのように評価するならば、祭式の共通のみがひとり歩くとはいえないのではないか。地域的に割拠する社会単位ごとの特色があり、地域的に政治的緊張があったとすれば、墳墓祭式の共通性を基礎とする心理的共通性は、精神的なものにとどまることなく、それは割拠する社会単位の内部の連帯の標章に転化し、政治性を帯びるものと私は考える。逆に、もし政治的連帯に起因するものでないとするなら、祭式の共通性を生み出した基盤がどのような性質のものであるかを説明する必要がある。さらに、この時期の祭式の共通性が政治的性格をもっていたと考えてこそ、この直後における前方後円墳祭式の拡散の歴史的意義が説明できるのではないか」としている（都出比呂志 1995b）

山尾幸久の考え方

「一般に、未開社会における共同規範は宗教として現れるとして大過ないと思われる。ところで問題は、かかる宗教的共同規範は、集団の内部的秩序にかかわるものしか想定しえないのであろうか、ということである。しかし地域集団をその形式と内容で維持するためには、地域集団相互間の秩序維持を必須とすること、少なくとも、集団間の交通が拡大し恒常化した史的段階においては、集団間的規範が必要であることは論を俟たないところである」（山尾幸久 1963）

それでは手焙形土器の場合はどうであろうか。手焙形土器の基本はくの字状口縁のA類と受口状口縁のB類であるが、その他の形態も存在し、地域色の強い手焙形土器も存在するように、器形に統一性は見られないし、祭式の内容と対象もさまざまである。こうした点を考慮すると手焙形土器自体に政治性を感じることはできない。しかし逆に、さまざまな祭式に威信財でもない手焙形土器

が使用されている点は重視されなければならないし、威信財でもない手焙形土器が時代とともに分布圏を拡大していったことも重視しなければならない。手焙形土器以外でこうした動態を示す例はないのである。

土器は粘土が素材であるので、形を認識していれば自由に形づくることができる。手焙形土器が単に火を燃やすための祭祀用土器ならば、もっと多くつくられていてもいいはずだが、手焙形土器は自由につくられることはなかった。土器の使用目的が限定されていたからだ。その理由として、①葬送儀礼にあたって新首長が首長簋を引継ぐにあたり、火を引継ぐことをもって首長簋を引継ぐ象徴としたこと。②火自体よりも例えば、香木のようないい香りを醸し出すものや、幻覚や精神高揚を伴う燃焼財が重要であったと考えられる。③は祭りにおいて重要な要素といえる。しかし、その実体は不明であるが、手焙形土器祭祀は内部で燃やす材料に付加価値があってはじめて存在し得た祭祀といえるだろう。

8 非在地系土器と手焙形土器

手焙形土器は非在地系土器が出土する遺跡から出土する例が多い。この点は各地で共通する現象である。それでは非在地系土器及びそれを出土する遺跡はどのような特徴をもっているのだろうか。その特徴を列挙してみると、①非在地系土器は人の移動と移住によって系の示す地域の人々によって出土地域でつくられた。なかには搬入された土器も存在し、これらの土器は人の移動によってもたらされたと考えてよい。さらに、在地系土器が主体となって出土する集落も存在し、こうした集落は集団移住によって築かれた。

②非在地系土器を出土する集落は、周辺地域と比較するといち早く古墳時代の土器組成が現れる。

③周辺に初期の前方後方墳や前方後円墳が築かれ、その後地域の先進地域として発展する場合が多い。

こうした特徴から非在地系土器を出土する遺跡は、人と情報の交差点で、新しい時代への原動力となった遺跡であったと考えられる。

ただ問題なのは、なぜ弥生時代後期から古墳時代初頭の時期に限られた時期に、未曾有の人の動きがあったのかということである。人の移動の原因についてはいくつかの考え方が示されている。例えば、時期がちょうど倭国大乱や邪馬台国と奴国との戦いにあたるので、奴国を濃尾平野に想定する研究者は、東海西部系土器の移動は難民の移動と考える。しかしこの時代、動く土器は東海西部系だけでなく、畿内、北陸、山陰の土器も動くのである。いっぽう、地方から中央へ土器が、人が動いた。この典型が纏向遺跡であろう。纏向遺跡は遺跡の特徴から都市的性格をもった遺跡で、最初の王都ではなかったかといわれている。纏向遺跡から出土している土器は、現在のところ南関東から中国・四国地方までの広範囲の地域の土器が出土している。王都だから各地の人びとの往来があったことは想定されるが、そうしたすべての人びとが土器を携えて往来したとは考えがたい。土器を携えあるいは纏向の地で故郷の土器をつくった人たちは、その地に長く滞在した人たちにちがいない。纏向遺跡の非在地系土器出土の背後に、王都建設のために各地から駆り出された人びとがいたのである。この理解が正しいとすると、纏向遺跡の造営主体者は、纏向遺跡から出土して

いる非在地系土器の範囲から人を駆り出すことができる政治権力をもっていたことになる。このように考えていくと、この時代の人の動きは天変地異などによる移動もあったかも知れないが、一定の政治権力のもと秩序だって人が移動・移住していたことが想定できる。つまり、古代国家成立前夜、列島内に未曾有の人の動きがあった。それは、古代国家成立時に膨大なエネルギーが発散されたことを示している。

手焙形土器の祭祀はどここの集落でも行われたわけではなかった。手焙形土器による祭祀は非在地系土器が出土する拠点集落で行われていた。人の移動・移住に政治性があったとすると、手焙形土器祭祀は単に心理的・精神的共通基盤だけの問題だけではなく、政治性も加味されていたと考えざるを得ない。

纏向遺跡が成立する時期は、手焙形土器編年の3a期にあたる。手焙形土器は纏向遺跡で出土している非在地系土器の範囲より広い北関東と北部九州まで達しているが、分布圏はほぼ重なっている。3世紀代の土器の動きから見て、邪馬台国があったとしたら奈良・大和しか考えられず、しかもその中核はヤマト・纏向遺跡であったと見てよいだろう。

各地の非在地系土器を出土する遺跡は、原大和政権（邪馬台国）の地方進出の拠点としての性格も併せもっていたのである。手焙形土器はこうした内容をもった遺跡から出土するのであった。

結 語

手焙形土器が出現するころには銅鐸、銅矛、銅剣を祭具とする祭祀が存在し、独自の分布圏を築いていた。また、墳墓も地方独自の形態を誇り、土器も地域ごとに分布圏をもっていた。つまり、各地に小宇宙的政治機構が存在しており、手焙形土器はこうした小宇宙を乗り越えて分布圏を拡大していったのであった。手焙形土器祭祀は強力な分布拡大因子をもっていたのである。

手焙形土器の発祥地は河内地方を中心とする大阪湾沿岸地域であった。手焙形土器の時期別の分布状況から手焙形土器祭祀を生み出した勢力が河内地方に存在し、次第にその祭祀を拡大していったとよみとることができる。ただその勢力が邪馬台国であったなら、手焙形土器の分布の拡大は邪馬台国の勢力拡大と考えられ、拡大因子は邪馬台国による宗教的共同規範が政治性であったといえる。例えこの因子が政治性をもっていなくとも、手焙形土器の分布圏内には心理的・精神的基盤（宗教的共同規範）が確立していたことになる。こうした宗教的共同規範の上に大和政権が成立し、新たに前方後円墳という基制を通して政治権力を強めて行くのである。（1999年11月22日）

引用文献

- 白石太一郎 1998「古市古墳群の成立とヤマト王権の原領域」『古墳の語る古代史』朝歴史民俗博物館振興会
高橋一夫 1998『手焙形土器の研究』六一書房
山中 琢 1991『倭人争乱』日本の歴史2 集英社
都山比呂志 1995a「祖霊祭式の政治性—前方後円墳分布圏の解釈」『日本古代の葬制と社会関係の基礎的研究』大阪大学文学部
都山比呂志 1995b「前方後円墳体制と地域権力」『日本古代国家の展開』上 思文閣出版
山尾幸久 1983「初期ヤマト政権の史的性格」『日本古代王権形成史論』

研究紀要 第16号

2001

平成13年3月25日 印刷

平成13年3月31日 発行

発行 財団法人 埼玉縣埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里村大字船木台 4-4-1

☎ 0493-39-3955

印刷 望月印刷株式会社